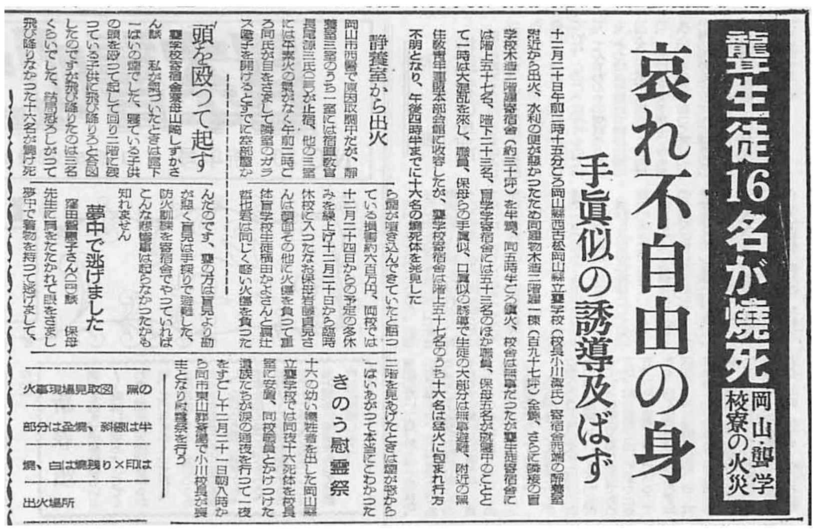
～「デフコミュニティと社会参加」指導案の紹介～

内容紹介①


聾生徒16名が焼死
岡山・聾学校寮の火災
哀れ不自由の身
手真似の誘導及ばず
静養室から出火
頭を殴つて起す
夢中で逃げました
きのう慰霊祭

掲載：日本聾唖ニュース,昭和26（1951）年1月1日,No.30 新年号,2面

第2回：「宿泊施設の情報・コミュニケーション保障」

聴覚障害者が社会的自立を果たす上で必要である情報保障を、宿泊施設の事例から学ぶ内容となっています。

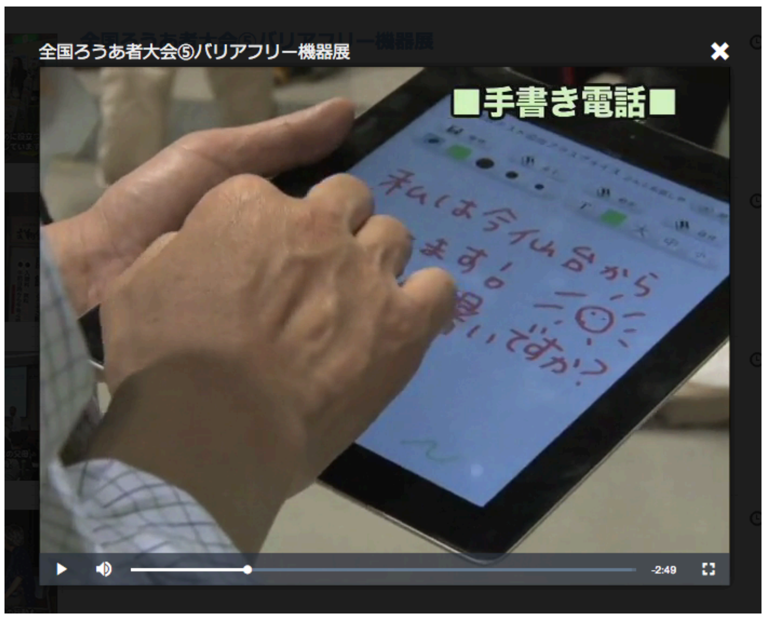
また、情報社会が進んでいても、まだなお聴覚障害者が生活のなかで情報不足を感じる場面が多くあることを踏まえて、聴覚障害者自身が社会にどう働きかけるべきなのかを考え、議論させることで課題解決能力を育てます。

1. 情報保障とコミュニケーション保障の違いを考える（導入）

2. 議論

宿泊時の問題点（不便な点、不安な点）を整理する。情報収集・予約、チェックイン、宿泊の場面別に、各グループから1つずつ出してもらう。その中で「情報保障」「コミュニケーション保障」の概念で整理する。

✧ 宿泊室のドアにあるセーフガードの役割とは？
✧ 宿泊施設側としての理解促進と、宿泊者側としての「聞こえないこと」の伝達などが取組課題として挙げられることを確認。


全国ろうあ者大会⑤バリアフリー機器展
■手書き電話■
私は今仙台から来ます！
いですか？
-2:49

3. 学ぶ

情報提供：聾学校寄宿舎の火災事故について知る。
映像視聴：最新の情報アクセシビリティ機器の種類について知る。
（手書き電話、聴導犬、光・振動機器など）

4. 宿泊施設の優れた取組例について（まとめ）

宿泊施設が光・振動機器をいくつ用意すれば良いのかという発問をして学生に考えさせる。地域の観光協会やホテルグループで対応している例を紹介する。

内容紹介②

第4回：「コミュニティ」

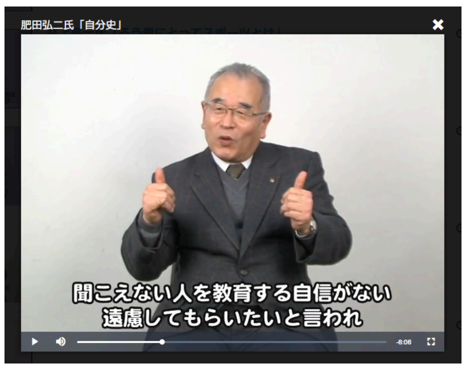
同じ聴覚障害のある先輩が経験した内容から聴覚障害者観と社会的背景を学ぶことで、自分との共通点、相違点をを見つけます。

さらに、デフコミュニティのモデルを提示して、デフコミュニティとろう者文化について知り、自分の立ち位置、社会との関わりについて改めて確認をすることができます。また、今後の自分の社会との関わり方、将来について考える機会を与えます。

1. 同じ聴覚障害のある先輩の話を聞く（学ぶ）

「自分史（肥田弘二氏）」の話を映像で流し、ワークシートにまとめる。

聴力喪失について
高等学校までの教育歴について
高等機関での学修について
就職について
ろうあ運動について


肥田弘二氏「自分史」
聞こえない人を教育する自信がない
遠慮してもらいたいと言われ
-6:06

2. 議論

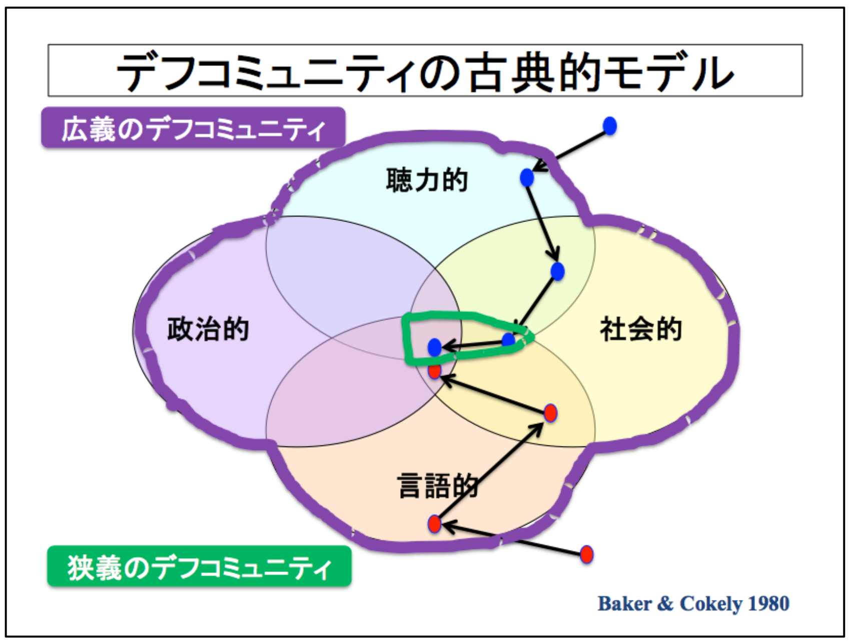
肥田氏の経験との違い、1960年代当時の世間の障害者観について考える。

✧ 1960年代に高校や大学への入学が断られたのはどうしてだろう。
✧ 1960年代の肥田さんとあなたの現在の経験で全く違う点はどういうものだろう。
✧ 逆に、時代が違っても共通している面は何だろう。

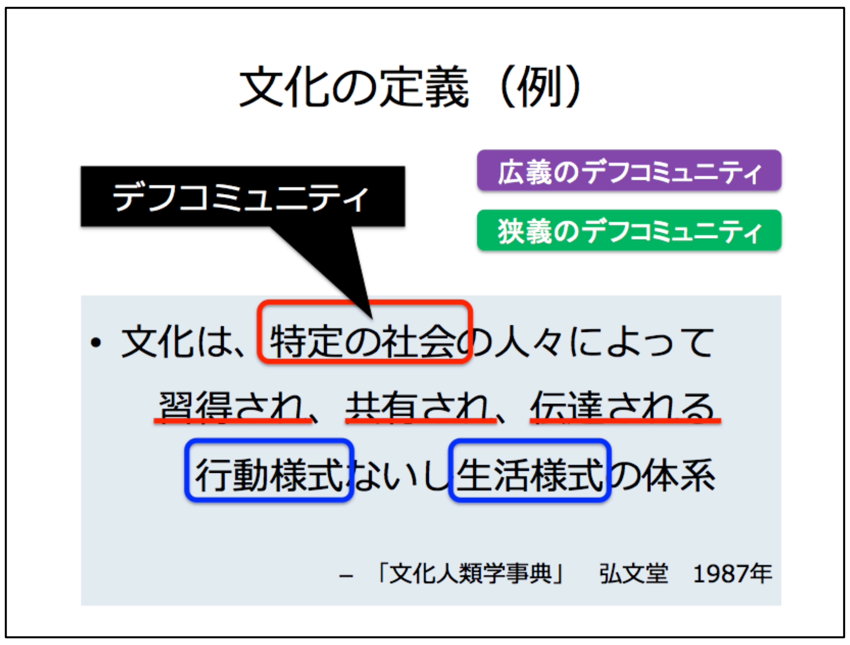
3. コミュニティの概念、文化との関係性について（まとめ）

Baker ＆ Cokely 1980のモデルを説明、デフコミュニティへの参加ルートの確認をする。狭義的、広義的見方についても話し合う。

✧ 手話の出来ない聴覚障害者も聞こえる人もデフコミュニティの構成メンバーとなりうる。


デフコミュニティの古典的モデル

広義のデフコミュニティ
聴力的
政治的
社会的
言語的
狭義のデフコミュニティ
Baker & Cokely 1980


文化の定義（例）

デフコミュニティ
広義のデフコミュニティ
狭義のデフコミュニティ

- 文化は、特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系

－「文化人類学事典」　弘文堂　1987年